

貸家探し

林芙美子

青空文庫

やまぎきちようん
山崎朝雲と云うひとの家の横から動坂どうざかの方へぼつぼつ降りると、福沢ふくざわ一郎いちろう氏

のアトリエの屋根が見える。火事でもあったのか、とある小さな路地の中に、一軒ほど丸焼けのまま柱だけつつ立つている家のそばに、サルビヤが真盛りの貸家が眼についた。玄関が二つあるけれども、がたがたに古い家で、雨戸が水を吸ったように湿っていた。ビール瓶で花園をかこつてあるが、花園の中には塵芥が山のように積んであり、看護婦会の白い看板が捨ててあつたりする。こんな家に住むのは厭いやだなど思い、路地から路地を抜けて動坂の電車通りへ出て、電車通りをつつ切り染物屋の路地へ這入はいると、ここはもう荒川区につぼり日暮里九丁目になつている。荒川区と云うと、何だか遠い処ところのように思えて、散々家を探すのが厭になり、古道具屋だの、炭屋だの、魚屋だののような日常品を売る店の多い通りを、私は長い外がい套とうの裾すそをなびかせて支那人のような姿で歩いた。炭屋の店先きでは、フランスに赤い水を入れて煉炭れんたんで湯をわかして近所のお神かみさんの眼を惹ひいている。私も少時はそれに見とれていた。支那そば屋、寿司屋、たい焼屋、色々な匂いがする。レコードが鳴っている。私は田端たばたの自笑軒の前を通つて、石材屋の前のおどけた狸たぬきのおきものを眺めたり、お諏訪すわ様の横のレンガ坂を当あてもなく登つてみたりした。小学生が沢山降りて来る。

みんな顔色が悪い。風が冷たいせいかも知れない。みんなあおぐろい顔色をしていた。

谷中の墓地近くになつても貸家はみつかりそうにもなかった。いたずらに歩くばかりで、歩きながら、考えることは情ないことばかりだった。朝倉塾の前へ来ると、建築の物々しいのには私はびつくりしてしまった。屋根の上にブロンズが置いてある。田舎のひとつのよるこびそうな建物だなど思った。石材屋と、最中屋との間を抜けて谷中の墓地へ這入るとさすがに清々とした。寺と云う寺の庭には山茶花の花がさかりだし、並木の木もいい色に秋色をなしていた。広い通りへ出て川上音次郎の銅像の処で少時休んだ。女の子供が二人、私のそばで蜜柑を喰べていた。それを見ていると、私の舌の上にも酸っぱい汁がたまりそうであつた。川上音次郎の銅像はなかなか若い。見ていて、このひとの芝居は私は一度も知らないのだなど、まるで、自分が子供のようによく思えたりする。銅像の裏には共同便所があるので、色々な人たちが出たり這入ったりしていた。

谷中葬場の方へ歩く。葬場の前の柳は十一月だと云うのにまだ青々としていた。ちょうど、道一つ越して柳の前になつた処に、小さい額縁屋があつて、昔からこの店のつくりだけは変らないようだ。私は、石材屋の横を左に曲つて桜木町に這入つてみた。門構えのつましい一軒の貸家が眼にはいつた。さるすべりの禿げたような古木が塀の外へはみ出て

いる。前の川端さんのお家によく似ていた。差配さはいを探して、その家を見せて貰ったが、長い間貸家だったせいか、じめじめしていて、家の中は陰気に暗かった。差配は、七十位の小さい白髪しろがみの爺さんじいで、耳が遠いのか、大きな声で「お住まいはどちらです」と訊きいた。「落合おちあいです」と云うと、「落合」とおうむ返しに応こたえて、私のなりふりには少しも注意せずに、部屋の中まで杖にすがって歩いていった。玄関が四畳半、座敷が八畳、女中部屋が三畳、離れが六畳の品のいい階下だったけれども、座敷の床とこの間の後に二畳の変な部屋があるのが怖かった。二階は八畳で見晴らしが利きますと、差配は急な梯子はしごをぼつりぼつりあがって行った。私もついてあがって行ったが、暗くて急な梯子段の中途にかかると、私はふと、佐藤春夫さとうはるお氏の化物屋敷と云う小説を連想して体がぞくぞくと震えた。梯子段は途中で曲つてなお二、三段急になっている。上は真黒で、差配のつく杖の音だけが廊下に音している。雨戸の隙間からにぶい光線がやみくもに部屋の中へ流れていて、眼がさだまってくる、差配の爺さんはがらがらと雨戸を繰くってくれた。廊下へ出ると、路地ろじがすぐ眼の下で牛乳屋も通る。豆腐屋も通る。豆腐屋もこの辺になると、リヤカーの上に箱を重ねてラッパを吹いて通る。

*

「おいくら位なんですの」と訊くと、五拾円だと云った。敷金しきぎんは四つ、なかなかいい値段だと思ひながら、押入れの鶴の絵に佻わびしくなったり、古新聞の散らかつている廊下に出て、この部屋へ寢床を敷いて寝る夜のことを考えるとあじきなかった。庭はとてもせまい。さるすべりと八ツ手やでと、つげの木が四、五本植うわつて、離れの塀りゅうぎわには竜りゅうのひげが植えてあつた。「一度相談して参りますから」と云うと、差配は、「さよう御座ございますか」と来た時と少しも変らない態度であつちこつち雨戸を閉め始めた。私も手伝つて離れの戸を閉めて靴をはいたが、差配のお爺さんはなかなか出て来ない。暗いなりに、誰か人がいて、お爺さんをどうかしたのではないかと、裏口へ曲つたが、もう差配の下駄はそこにはなかつた。私はもう一度差配の小さい玄関げんかんに立つて、お爺さんは帰りましたかと聞いてみた。共同水道のような処で水を汲んでいたお婆ばあさんが、「はい帰つて参りました」と返事をしてくれたので、私は吻ほつとして路地を抜けた。雨あがりの寒い湿つた日だから、あの家もあんなに陰気だったのだらうけれども、あんな差配だったら借りてもいいなと思つた。

随分歩いた。足の先きがずきずきするし、黄昏たそがれでだいぶ腹がすいたので、音楽学校のそばをぼくぼく急ぎ足に歩くと、塀の中の校舎に灯火あかりがはいって、どの窓からも練習曲が流れて来て、十二、三の子供たちの頭が沢山見える。

私は、角店になった大きな蕎麦屋そばへ這入った。蕎麦屋の中は黄昏でまだ灯火を入れていなかった。「いらつしやアイツ」と大きな声でジャケツを着込んだ若い衆が迎えてくれたが、貸家や職を探して蕎麦屋に立寄る風景は、私の生活にたびたびあつたように思えて、私は、自分の胸の中に、愕おどろきとも淋しさとも苦笑ともつかないものを感じた。鍋焼なべやきを一つ頼んだ。熱い土鍋を両手ではさんで、かまぼこだの、ほうれん草だの、椎茸しいたけだのを一つ一つ愉たのしみに喰べた。全くの孤独で、私は自分で自分に腹を立てたりしたが、がらがらと戸があいて俵くるまひ曳ひきが一人はいつて来ると、私と背中合せにもりを一つあつらえて、美味まそうに大きな音をたてて蕎麦をすすり始めた。それが、説明もつかないほど私にはさすがにしかつた。私は鍋焼を食べ終ると、金を払いながら、「この前を通っているバスはどこへ行つてますか」と尋ねた。「玉たまの井いまで通つてます」と、若い衆が灯火をつけながら教えてくれた。「浅草の方へ行つてますか？」ともう一度尋ねると、雷かみなりもん門もんの前で止まると云うことであつた。私は「御馳走ごちそうさま様」と云つて戸外へ出て、明るいうちにと慾よばつて、

また、その辺をぐるぐると歩いてみた。宇野浩二さんうのこうじの家の前へ出る。宇野浩二さんとは
此様なお住居すまいにいられるのかと、私は少時立つて眺めた。どうした事か表札がさかさまに
なっている。二階の窓にはすだれがさがっていた。塀の中により添ったような造りで、大
きく繁った八ツ手があった。隣りは何をする家なのか、ビール箱のような木箱が、宇野さ
んの石塀の方まではみ出て、自転車が二台路上へ置いてあった。

宇野さんの通りをT字型につきあたった処つたに蔦つたの這った碁会所ごかいじよのような面白い家があ
つて、貸家札がさげであるのが眼にはいった。私はもう暗くなりかけたのに、「貸家があ
りますそうですが、広さはどの位なのでしょう」と尋ねると、夕飯時の忙がしきで、そこ
のお神さんはあんまりいい返事はしてくれなかった。貸家は小さい家らしかった。

「そうね、六畳に四畳半に……」と話して貰っているうちに、お互いに貸す意志も借りる
意志もないのに、家の説明をしたり聞いたりすることは妙なことだった。私はお神さんの
話を呆ぼんやり聞いているのだ。

*

そこを出ると、すっかり暗くなったので、浅草へ出てみることにした。浅草へ出るときがに晴々はればれして池の端はたの石道をぼくぼく歩いてみた。関東だきと云うのか、章魚たこの足のおでんを売る店が軒並みに出ている。花屋敷をまわって、観音堂かんのんどうに出て、扉とびらの閉とつてしまった堂へ上つて拜んでみた。私の横にはゲートルをはいた請負うけおいし師風の男が少時おがんでいた。観音様は夜通しあいているのかと思つたら、六時頃には大戸おおとが降りてしまうのであつた。仲店までには色々な夜店が出ている。海苔のりようかんを売っている若い男は国定くにさだ忠治ちゆうじの講談本を声高く読んでいたりした。人差指のない男が人參や大根を刻む金物を売っていたり、八十八ヶ所めぐりのスタンプ帳を売っている所なぞ、私は歩きながら子供のうに面白かつた。風船や絵本を売る子供たちが、夕べの別れに、「おしんちゃんに来るように云つとくれ、いいかい。おばちゃんによろしくつてね」とこんなことを高声で話しあつて、公園の夜霧のなかへ子供たちはちりぢりに消えて行っている。仲店では文字焼きの道具を買つた。帰つて文字焼きをして遊ぼうと思つた。伊勢勘で豆人形と猫を買つた。雷門へ出ると、ますます帰るのが厭になり、十年振りに私はちゃんやへ肉を食べに這入つてみた。何十畳とある広い座敷の真中に在郷軍人と云つたような人たちが輪になつて肉をたべていた。私は六十八番と云う大きな木札を貰つて、女中おやこに母娘連れの横へ連れられて行

った。「しやもになさいますか、中肉、それにロースとございますけど」太った銀杏返しの女中にはここにこしてしやべっている。私はロースを注文してばさばさと飯をたべ始めたが、さっきの鍋焼きで、腹工合はいっぱいだった。働いている女中は、みんな日本髪で、ずつこけ風に帯を結び、人生のあらゆるものにびくともしないような風体に見える。うらやましい気持ちであった。私はロースの煮えたのを頬ばりながら、お客の顔や、女中たちの顔を眺めていた。まるで銭湯のような感じで、紅葉の胸飾りをしたお上りさんたちもいる。バスケットを持った田舎出の若夫婦、ピクニック帰り、種々雑多な人たちが小さい食卓を囲んでいる。

私の隣の母娘は、もう勘定だ。この母娘は二人で平常暮らしているのじゃなくて、たま逢つたのだろうと思えるほど、二人の言葉や服装に何か違いがあつた。娘はクリーム色の金紗きんしゃの羽織を着て、如何にも女給のようだったし、母親は木綿の羽織に、手拭いで襟あてをしていた。

浅草から帰つたのが七時半ごろ、貸家も何もみつからなかつたが朝の憂鬱ゆううつをさばさばと払いおとした気持ちであつた。私は年寄りの部屋で手焙りに火をおこして文字焼きの用意をした。忙がしいはずの私がかうどん粉をこねたりしているのを家人たちはびっくりして

見ていた。文字焼きで、あはあは笑ったりして、早く寝てしまったが、その翌^{あく}日、私の憂鬱は再びかえって来た。豊島薫さんが亡くなったと云う郵便が来たり、厭な手紙ばかりだった。豊島さんへは二、三日前花束を持って行つたが、あの花束は亡くなられた豊島さんの枕元でまだ咲いているだろう。私は風呂をわかつて二度も三度も這入つた。落ちつかないと、私には風呂にはいりたがるくせがある。「豊島さんへ行つたの何時^{いつ}だったかしら？」と年寄りに訊くと、十八日だと教えてくれた。都の上山君が、あやふやな番地を教えしてくれたために、半日、阿佐^{あさがや}ヶ谷の町を、家にいる小さい書生さんと歩きまわつた。家が見つかつた時には、へとへとになつて、私は上山君にかんかんになつて怒つていた。怒つていたから、豊島さんのお家にはよう這入らず、書生さんに花と手紙を持たせて私は戸口に立つていた。だから、生前の豊島さんには長いことお眼にかからず仕舞い。こんなに早くお亡くなりになるとも思わないし、お眼にかかつてお見舞いしておけばよかつたと悔いでいっぱいだった。

豊島さんも御家族が多いので心残りだつたらうと思う。生前の豊島さんには三、四度位しかお逢いした事がない。漫画をとりいらつした時、加藤悦郎さんと見えた位で、浅いおつきあいだったが誠実のある立派な人であつた。読売の河辺さんだつたか、豊島さんを

非常に讚^ほめていた。豊島さんの事を考えると、本当に死んでは困ると思った。長生きして一生懸命な仕事を一つでも残したいものだ。貸家を探すのは新聞広告に出してきめることにした。

青空文庫情報

底本：「林芙美子随筆集」岩波文庫、岩波書店

2003（平成15）年2月14日第1刷発行

2003（平成15）年3月5日第2刷発行

初出：「都新聞」

1935（昭和10）年11月27日～30日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：林 幸雄

校正：noriko saito

2004年8月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

貸家探し

林芙美子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>